

小 学 校

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

家 庭

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	3
III	研究仮説	3
IV	研究方法	4
V	研究構想図	5
VI	研究内容	6
1	検証授業①	6
2	検証授業②	15
VII	研究の成果	23
VIII	研究の課題	24

研究主題

学びを実生活に生かそうとする児童の育成 ～ 自らの生活に生かす場面を考える活動を通して ～

I 研究主題設定の理由

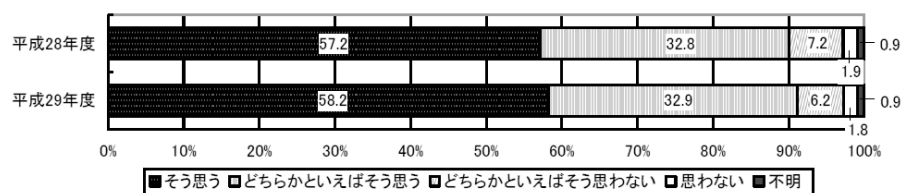
現代の社会は、少子高齢化に伴い、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化に加え、経済・社会のグローバル化・情報技術の進展、地球環境問題など急激に変化している。さらに、社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきた。平成 28 年 12 月に告示された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』には、「そうした変化が、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。」と述べられており、学校教育においては、一人一人の子供たちが、自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、よりよい人生とよりよい社会を築いていく、持続可能な社会の創り手となっていくような教育が求められている。

また、新学習指導要領の小学校家庭科においては、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成すること」を目標としている。「生活の営みに係る見方・考え方」については、小学校学習指導要領解説家庭編において「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」と示されており、小学校家庭科で培う資質・能力は、子供たちの自身の未来や人生設計、生き方を考えていく上で重要な視点を包含しており、先に記した社会の教育に対する要請との関係が深い。このことより、家庭科における学習が、児童が将来的に身に付けていかななくてはならない資質・能力を育成していく教科として役割が大きいことを考えることができる。小学校家庭科では、児童が生涯にわたってよりよい生活を目指していく主体性をもち、将来の個々のキャリア形成との関連や、よりよい社会づくりを意識した生活をしていくための基礎を確実に培っていくことが重要となってくる。

一方、『児童・生徒の学力向上を図るための調査』（東京都教育委員会）の「生活や行動に関する児童の意識調査」によると、「自分の住む地域や社会をよくしたいと思いますか。」という質問に対して、「そう思う」と回答した第 5 学年の児童の割合は平成 28 年度・29 年度ともに 50%を超えているのに対し、「たとえ小さなことでも、地域や社会をよくするために何かしたことがありますか。」という質問に対しては、「ある」と回答した児童の割合は、平成 28 年度は 34.1%、平成 29 年度が 35.3%であった。

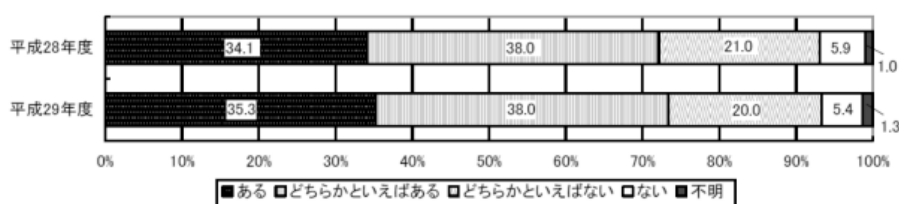
この結果から、家庭や地域の生活をよりよく創造しようとする意欲が見られるが、学習で習得した知識及び技能を活用して、主体的に家庭や地域社会と関わり、参画しようとする態度や行動にはつながっていないのではないかと考えた。

① 自分の住む地域や社会をよくしたいと思いますか。



【図1『平成29年度児童・生徒の学力向上を図るための調査』の3章「児童・生徒質問紙調査」の結果より抜粋】

② たとえ小さなことでも、地域や社会をよくするために何かしたことがありますか。



【図2『平成29年度児童・生徒の学力向上を図るための調査』の3章「児童・生徒質問紙調査」の結果より抜粋】

また、平成28年12月に告示された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』においても、家庭科教育の成果と課題について、家庭科の学習は、「普段の生活や社会に出て役立つ、将来生きていく上で重要であるなど、児童の学習への関心や有用感が高いなどの成果が見られる。一方で、家庭生活や社会環境の変化によって家庭や地域の教育機能の低下等も指摘される中、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。」ことが指摘されている。これらの課題に対し、家庭科教育において、学んだ知識及び技能を実生活に活用していく力が育成されていないことが要因の一つなのではないかと推測した。そこで、家庭科の学習において自身のこれまでの授業や、幾つかの実践研究の学習過程を分析した。その結果、事実に知識を実践的・体験的な学習活動を通した、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解とそれらに係る技能であると捉え、概念的知識を、課題を解決するためや、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造するために必要な汎用的な知識と考え、家庭科の学習の現状として、基礎的・基本的な知識及び技能の定着のための実践的・体験的な学習活動に過度な重点を置いてしまっていることにより、児童に身に付けさせている知識が、事実に知識に留まり、児童それぞれの生活に生かすことができるような概念的知識として質的に高められていない現状があるのではないかと考えるに至った。

そこで、小学校家庭科で習得する「学び」の定義を、基礎的・基本的な知識及び技能に加え、様々な生活環境や家族構成でも生かすことができる概念的知識及び生活の営みに係る見方・考え方とし、この「学び」の習得を意識して、学習内容や方法を工夫していくことで、主体的に課題に関わる力及び、家庭や地域における実践力を育成していくことができるのではないかと考えた。具体的には、基礎的・基本的な知識及び技能を、自らの生活にどのよう

に生かしていくかという場面を設定し、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら、よりよい生き方につながる方法を考えていく活動を取り入れていく。このことにより、既存の知識及び生活経験と、授業を通して学んだことを結び付け、家庭や地域などにおける様々な場面で活用される概念的知識へと知識を深めていけるのではないかと考えた。同時に、変化する状況や課題に応じて、思考錯誤しながら実践を繰り返すことで、主体的に選択・判断・実践する力の育成を図るとともに、学びを日常生活に生かしていくことが、快適さや豊かさにつながることに気付く経験ともなると考えられる。これは、生涯にわたってよりよい生活を目指していく動機にもなり、将来の個々のキャリア形成との関連や、よりよい社会づくりを意識した生活の基礎になるとも言える。以上のことより、本研究主題を、「学びを実生活に生かそうとする児童の育成」、副主題を「自らの生活に生かす場面を考える活動を通して」とし、授業改善を図ることにした。

Ⅱ 研究の視点

1 基礎的・基本的な事实的知識及び技能と概念的知識の習得に向けた視点

- (1) 指導上の目標として、各題材の特色や、身に付けさせたい事实的知識及び技能について、他の題材で習得する事实的知識とのつながりや、児童の生活環境とどのように関係しているのかを整理し、身に付けさせたい概念的知識について明確にした上で授業構成を行う。
- (2) 教師が授業で児童へ提示するめあては、授業における活動内容に留まらず、各題材で習得させたい概念的知識につながるようなめあてを提示し、児童の思考が事实的知識から概念的知識に高められるように、活動内容を計画していく。

2 生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

- (1) 題材の様々な場面において児童自身の生活を振り返らせ、自らの生活と学習内容のつながりを考えさせることで、児童自身にとって身近な問題を扱っていることを意識させる。
- (2) 既存の知識を実生活の中で活用したり、よりよい行動を選択したりするために、児童が生活の営みに係る見方・考え方を働かせることができるような発問の仕方、資料の提示の仕方及び扱う教材などを精選する。

Ⅲ 研究仮説

小学校家庭科の目標の一つは、「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける」と小学校学習指導要領に記されている。しかし、前述したように、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるだけでは、学びを実生活に生かしていくには不十分である。身に付けた事实的知識を実生活で生かすためには、自らの生活場面に合わせて、必要な知識や技能を取捨選択したり、不足しているものを別の知識で補ったりするなどの活用が求められる。そのためには、事实的知識を身に付けるだけでなく、多様な事实的知識の中から共通点を見いだしたり、他の事例をもとに考えたりする活動を通して知識を概念化させ、「概念的知識」として児童に身に付けさせることが必要になってくる。よって、授業においては、各題材で身に付けさせたい概念的知識を明確にした上で、学習過程を組み、概念的知識の習得に向けた学習

のめあてを設定していくようにする。また、扱う学習内容が身近な学習であることを児童に意識させたり、既存の知識を十分に出させたりする活動が有効であろうと考える。これらの活動は児童が生活の営みに係る見方・考え方を働かせられるような場面を設定し、児童の思考を対話的な活動を通して、広げ深めていくことで、実生活への活用を促し、よりよい行動の選択肢を増やすことになる。生活の営みに係る見方・考え方を働かせるためには、「見方・考え方」とは何かを決めて教え込むのではなく、見方・考え方を働かせられるよう授業の構成を考えていかななくてはならない。よって、発問・資料の提示の仕方、扱う教材などの精選に着目して具体的な手だてを模索していきたい。

これらのことから、以下のように仮説を立てた。

児童に身に付けさせたい概念的知識を明確に設定した上で学習を展開し、対話的な活動を通して生活の営みに係る見方・考え方を働かせることのできる場面を設定したり、発問の仕方や資料提示の仕方、扱う教材などを精選したりすることで、学びを実生活に生かそうとする児童を育成できるであろう。

Ⅳ 研究方法

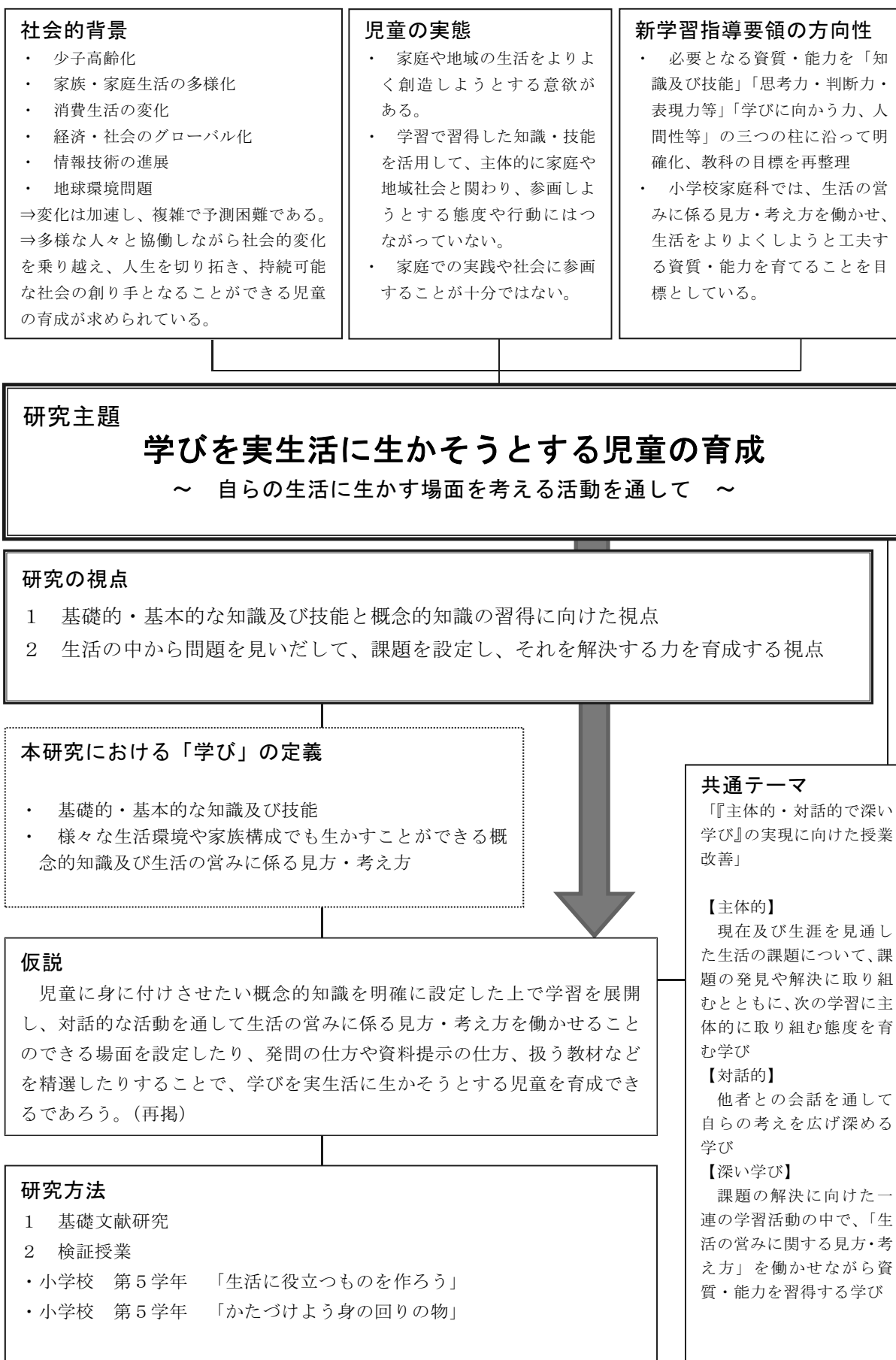
1 基礎文献研究

- ・「児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」（東京都教育委員会、平成 29 年）
- ・小学校学習指導要領解説家庭編（文部科学省 平成 20 年 6 月）
- ・小学校学習指導要領解説家庭編（文部科学省 平成 29 年 6 月）
- ・小学校学習指導要領（文部科学省 平成 27 年 3 月）
- ・小学校学習指導要領（文部科学省 平成 29 年 3 月）
- ・次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ
(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程分科会 平成 28 年 8 月 26 日)
- ・家庭・技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）
家庭科、技術・家庭科（家庭分野）において育成すべき資質・能力の整理（案）
家庭科、技術・家庭科（家庭分野）における見方や考え方（案）
家庭科、技術・家庭科（家庭分野）における思考力・判断力、表現力等の育成イメージ
(家庭・技術・家庭ワーキンググループ 平成 28 年 8 月 26 日)
- ・幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中央教育審議会 平成 28 年 12 月 21 日）

2 検証授業

- ・第 1 回検証授業
日時：平成 29 年 9 月 22 日（金）
対象学年：第 5 学年 題材名：「生活に役立つものを作ろう」
- ・第 2 回検証授業
日時：平成 29 年 10 月 26 日（木）
対象学年：第 5 学年 題材名：「かたづけよう身の回りの物」

V 研究構想図



VI 研究内容

1 検証授業①

(1) 題材名 第5学年「生活に役立つものを作ろう」

(2) 題材の目標

- 身の回りで使われている布の性質や特徴に関心をもち、生活に役立つ小物を製作し、その過程で得た知識や技能を活用しようとしている。(家庭生活への関心・意欲・態度)
- 製作計画を考えたり、自分なりに工夫したりする。(生活を創意工夫する能力)
- ミシンの安全な使い方が分かり、生活に役立つものを製作することができる。
(生活の技能)

- 布の特徴や性質を理解する。ミシンの安全な使い方が分かる。
(家庭生活についての知識・理解)

(3) 題材の指導計画と指導上の留意点 (全 14 時間)

次	時	学習活動	得られる知識・技能 ◇見方・考え方	指導上の留意点
1	1 本 時	布で作られたものの特徴について考える。 (布製品の種類・布の特徴)	○布製品の特徴が分かる。 ◇「快適」	・日常生活に布が欠かせない物になっていることに気付かせる。 ・自己の生活の「快適」につながる布の特徴を生かした使われ方をしていることに気付かせる。
2	2 3 4 5 6	ミシン縫いと手縫いの違いに気付く。 ミシンの使い方を知る。	○ミシンの安全な使い方が分かる。 (各部の名称・上糸・下糸のかけ方・直線縫い)	・ミシン縫いと手縫いを比べ、それぞれのよさに気付かせる。 ・ミシンの基本的な操作やミシンを用いた直線縫いの仕方について理解させる。
	7 8 9 10 11 12 13	生活に役立つものの製作をする。(ランチマット)	○製品に応じて、手順や縫い方に工夫が必要なことが分かる。	・製作に必要な用具(はさみ類、アイロン、ミシン)の安全な取扱いについて理解させる。 ・縫い始めや縫い終わりや角の縫い方など、目的に応じた縫い方や手順を考え、製作できるようにする。

3	14	身の回りの布製品の使われ方について考える。	○布製品を活用することで、快適な生活を送ることができる。 ◇快適	・自分が製作した布製品について工夫したことを振り返らせ、自分の生活が「快適」になるように、どのように生かしていくかを考えさせる。
---	----	-----------------------	-------------------------------------	--

(4) 指導観

布を用いた製作を通して、課題をもって、製作に必要な材料や手順、製作計画、手縫いやミシン縫いによる目的に応じた縫い方、用具の安全な取扱いに関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、製作計画を考え、製作を工夫することができるようにすることをねらいとしている。

第5学年の1学期に、「手ぬいのよさを生かそう」において、針と糸を使って簡単な手縫いの方法を学習し、フェルトを使って小物作りを行った。本題材では、ミシン縫いの技能を習得させることにより、製作の幅を広げて小物作りに取り組む。

まず、身の回りの布製品を調べ、材料である「布」に着目し、布の種類や性質を体験的な活動を通して知り、「布」の特徴に気付かせる。そして、製作過程において、なぜそのように縫うのか、根拠について理解できるように配慮し、仕上がった作品を日常生活で活用するために、生活の場面に適していることや手入れしやすいこと等を考えて布の選択や布端の始末などの工夫が必要なことに気付くことができるようにする。

布製品を手作りする喜びを感じたり、それを生活に役立てたりするだけでなく、製作方法を振り返り、仕上がりの結果を評価することを通して、目的に応じて布でできた既製品を購入したり使ったりする時にも役立てることができる視点や、身の回りにある布製品を評価する力を高めることをねらっている。

(5) 視点にせまる手だて

ア 基礎的・基本的な知識及び技能と概念的知識の習得に向けた視点

2年間の家庭科全体の指導計画において、題材ごとの概念的知識を支える事実に知識を明確にし、事実に知識がどのように関連していくのかを構造化することにより、一題材における基礎的・基本的な知識及び技能の習得のみならず、小学校家庭科において習得させたい概念的知識の習得に向け段階的に計画することができる考えた。

本題材において、事実に知識は、布の構造やこれまでの生活経験を通した布の使用感等と捉え、概念的知識として、目的に合った布製品の使用が快適な生活につながっていくという知識につなげていきたい。

また、【図3】のように、習得する事実に知識を本題材内のみで概念的知識へつなげるのではなく、「A家庭生活と家族」「D身近な消費生活と環境」等の内容と相互に関連を図り、概念的知識を習得するように学習過程を工夫する。例えば、仕上がった作品を日常生活で活用することで、手作りのよさを味わうことができ、家庭生活の豊かさや快適さにつながることや、布製品に関心をもち、評価する力を高めることにより、身近にある衣服や布製の小物など布製品を選択・購入・使用する際に、よりよい消費行動や環境に配慮した生活を送ることができることなど、家庭生活を総合的に捉えながら概念的知識へつなげていく。

付けられるような活動を計画し、確実な知識の習得をねらった。具体的には、目的意識をもたせることで、布を材料として捉えさせる場面設定と、これから製作しようとしている製品に適している布を、特徴を生かして選択させる活動を設定し、題材のまとめでは、製作における課題解決の意味をもつ活動を取り入れた。また、部分的に学んだ内容を関連付けて考えられるように、言葉を使って再構成させる場を設定する。これは、知識の定着を図るためにも有効な手段になると考える。

イ 生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

児童の生活場面で使われている身近な布製品を、実際に手に取って調べたり考えたりする対話的な活動の中で、新たに習得した基礎的・基本的な知識が児童の身の回りにある布製品と結び付いていくような課題解決的な学習の展開を計画する。本題材以前に製作した布製品や、身の回りで日常的に使われている布製品を用いて、それぞれの布の特徴や工夫について考えられるようにする。

本題材における見方・考え方を、衣生活における「快適」とし、布のそれぞれの特徴が、快適な生活を支えるために、どのように自分の生活と関わっているのかを考える視点として意識させた。布と他の素材と比較したり、布製品の良さやその理由を考えたりすることを通して、概念的知識につながるような見方・考え方を働かせる場面を設定する。また、児童の実生活で無意識に経験や体験している布に対する感覚や気付きを、教師が価値付けることで、思考を深めることができると考えた。そのために、本題材において下の【表1】のような整理を行い、布の構造による特徴と、生活における適した使用について事前に教師が整理しておき、児童に知識を捉えさせる際に適切な発問や資料提示ができるようにすることが必要であると考えた。布に関する各情報を得た後に、「給食の時に使うランチマットを製作するには、どの布が適しているか。」について見方・考え方を働かせながら思考する場面を設定し、児童から想起されそうな身の回りの布製品と、布の組織拡大図を提示しながら、視覚的に製品と布の特徴がつながるようにする。

【表1 教材で使用する布の特徴】

布の種類	●構造 ○主な特徴	使われていると予想される布製品
織物	●縦糸と横糸で織った布 ○縦の方向に伸びにくく、横、斜めの方向も編物のように伸びない。 ○斜めの方向は縦横と比較すると伸びる性質がある。	ハンカチ、Yシャツ、スカート、ズボン、白衣、三角巾 ランチマット、エプロン、トートバッグ、巾着袋 等
編物	●1本の糸で編んだ布 ○縦の方向にも横の方向にもよく伸びる。	体育着、ジャージ、水着、靴下、Tシャツ、セーター 等
フェルト	●繊維をからませて固めた布 ○縦、横の区別がない。 ○ほつれない。 ○伸びが少ない。 ○洗濯できないものもある。	マスコット、小物入れ、コースター、毛筆書写の下敷き 等

(6) 本時（1／14 時間）

ア ねらい

○布には特徴があり、その特徴を生かして使用されていることが分かる。

【生活についての知識・理解】

イ 展開

	○学習活動 ◆発問 ・予想される児童の反応	●教師の支援 □評価	資料 等
導 入	1 本時の学習課題をつかむ。 ○手縫いの小物作りに使った布の使われ方について振り返る。 ○身の回りにある布で作られているものについて想起する。 ◆身の回りにある布で作られたものにはどのような物があるだろう。 ・洋服、体育着 ・タオル ・カーテン ・手提げかばん ・ランチマット ・枕 ・マスク ・エプロン	●手縫いの小物作りに使った布を振り返る。 ●1日の生活について想起し、多様な布製品の使われ方に気付くようにする。 ●日常生活に布は、欠かせないものになっていることに気付かせる。	・製作した小物 ・身の回りの布製品（体育着・Tシャツ・くつした・手提げバッグ・ランチマット・エプロン・タオル・ハンカチなど）
展 開 1	2 身の回りの布製品のよさを考える。 ○身の回りの布製品を観察することで、そのよさについて考え、表にまとめる。 めあて 布はどのような使われ方をしているのだろう ◆布製品には、どのような特徴やよさがあるか考えてみよう。	●紙、ビニール、プラスチック、金属など他の材料とも比較しながら布のよさを考えられるようにする。	・学習プリント ・学習プリント

	・体育着、Tシャツ（柔らかい、体の形や動きに合う、汚れたら洗濯できる、着心地がよい。） ・タオル（水や汗を吸う、洗濯できる。） ・エプロン（汚れを防ぐ、洗濯できる、料理が楽しくなる） ・書写の下敷き（たためる。紙がすべらない。） ・手提げバッグ（重たい物も入る、使わないときは折って小さくなる、丈夫、しわになりにくい。）		
展開 2	3 身の回りの布製品がどの布からできているか考える。 ○3種類の布とその特徴を知る。 ①織物…たて糸、よこ糸で織った布 ②編物…1本の糸で編んだ布 ③フェルト…繊維をからませて固めた布 ○身の回りの布製品について、3種類のどの布かを考えて予想する。 ・体育着・Tシャツ…編物 ・タオル…織物 ・エプロン…織物 ・毛筆書写の下敷き…フェルト ・手提げバッグ…織物 ◆ランチマットを製作するときに、3種類の布のうち、どれが適しているか考え、またその理由を発表しよう。 ・織物 理由：たたみやすい。じょうぶそう。伸びないからぬいやすい。 ・編物 理由：伸びる。大きさが変わる。さわり心地が他と異なる。 ・フェルト 理由：糸が出ない。厚い。	●布の特徴を捉えるときに、色や柄、素材の違いではなく、組織の違いで分類する。 ●布見本と布製品を比較するために観察する視点を確認する。 （表面をよく見る、触る、伸ばす） ●目的意識をもって布を材料として捉えて考えることにより、布製品に適している布を性質から選択できるようにする。 ●この場合の適した布とは、どのような布なのかを考えさせる。	・布見本（織物、編み物、フェルト） ・組織拡大図 ・拡大鏡

ま と め	4 活動を振り返り、調べて分かったことや気付いたことを発表する。 ・布には、いろいろな特徴があることが分かった。 ・布には、種類ごとに役割があることが分かった。 ・生活に必要で、適している布があることが分かった。 ・物を作る時、それぞれに合う性質の布を選ぶことが大切だと思った。 5 本時のまとめをする。 6 本時の活動を振り返る。	●全体で意見を共有させ布を選択した理由が適切かどうかを判断できるようにする。 □布には特徴があり、その特徴を生かして使用されていることが分かる。【知・理】(学習プリント)	
-------------	---	---	--

ウ 板書計画

[身近にある布で作られている物]

- ・洋服（ズボン スカート・体育着 Tシャツなど）
- ・くつ下
- ・タオル
- ・カーテン
- ・ぼう子
- ・エプロン
- ・ぞうきん
- ・下着
- ・ふとん
- ・ぬいぐるみ

布はどのような使われ方をしているのだろう。

《分かったこと》
布で作られたものは、たくさんある。

*布には**よさ**がある。
たためる。あらって何回も使える。
やわらかい。

布製品	よさ
Tシャツ	のびる。動きやすい。 あらえる。着心地がよい。
タオル	水やあせをすう。あらえる。
エプロン	あらえる。料理が楽しくなる。
毛筆書写の下じき	やわらかい。字が書きやすい。 たたんだり、丸めたりできる。
手さげバッグ	持ちやすい。軽い。 たためる。重たい物が入る。

ランチマットをミシンで作るとき
どのような布が適しているか考えよう。

[布地の種類]

- ・織物
- ・編物
- ・フェルト

まとめ

布には特ちょうがあり、そのよさを生かして、たくさんの生活の場面で使われている。

(7) 検証授業の振り返り

ア 成果

(ア) 基礎的・基本的な知識及び技能と概念的知識の習得に向けた視点

これまでも、様々な生活に役立つ物作りの学習を行ってきたが、児童の製作の工夫が、製品の実用性や使用中の快適さにつながっていない様子が多々見られた。本研究においては、衣生活における「快適」という見方・考え方を働かせる場面を設定し、布製品を観察して布の種類や丈夫な縫い方、布端の始末の仕方を調べたり、段階見本を用いて製作過程を確かめたりしながら、製作の工夫を考えたことで、製作の手順に根拠をもちながら学習活動を進めることができた。このことで、基礎的・基本的な知識及び技能を習得しながら、目的に合った布製品の使用や製作に向けての概念的知識へと知識を深めていくことができた。また、これまでの学習では、縫い代の始末の方法を間違えてしまったり、製作に時間がかかってしまったりして、ミシンに対して苦手意識をもつ児童も少なくなかったが、布の性質、縫う部分や布製品の使い方に応じて、丈夫さや針目の大きさを意識して縫ったり、ほつれやすい布端を始末したりすることの必要性に気付き、「まっすぐに縫い目を細かく縫うことができた。」「忘れずに返し縫いをして、丈夫にできてよかった。」「きれいな長方形に縫えた。」など、具体的に仕上がりを評価する姿について、クラス全体に工夫を紹介したり、具体的な製作指導を行ったことにより、製作への自信と日常生活に活用しようとする意欲や態度も伸長することができたと考える。

(イ) 生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

本時では、身近な布製品と比較したり、その特徴を考えたりする場面を通して、布製品を色や柄の好みだけではなく、使い心地や手入れのしやすさなどの快適さを意識して、布を材料として見る視点をもった。児童にとって身近な布製品（Ｔシャツ・タオル・エプロン・毛筆書写の下敷き・手提げバッグ）の五つを例として、実際に見たり触ったりして、布の特徴を考える活動を行った。布製品を生活のどのような場面で、どのように使うことがあるか、また、その製品が布ではなく他の素材（紙、ビニール、プラスチックなど）でできた製品だったらどのように思うかを想像し、その特徴を比較しながら、布のよさについて思考を深めた。本時の学習プリントからは【表２】のような児童の反応があった。

【表２ 本時で見られた児童の回答例】

布で作られた物	触ったり使ったりして感じた良さ	
	「布地の性質・特徴」	「快適」に関わる回答
Tシャツ	・風通しがよい。 ・たためる。 ・伸びる。	・軽くて涼しく過ごせる。 ・柔らかくて着心地がよい。 ・動きやすい。 ・洗濯しても乾きやすいから清潔。 ・運動するのに適している。

タオル	・水を吸う。 ・何度も使える。	・汗をよく吸い肌が清潔である。 ・洗えるから清潔でいられる。 ・毎日洗濯できるから清潔
毛筆書写の下敷き	・柔らかい。 ・摩擦が大きい。	・半紙を載せるのによい。 ・半紙がすべりにくい。 ・運動着には向いていないと思う。
手提げバッグ	・柔らかい。 ・紙袋より丈夫。 ・長く使える。	・たたんで小さくなるから持ち運べる。 ・重い物を入れても破れない。 ・経済的で、環境にもよい。

布の種類（織物・編物・フェルト）の布地見本と布製品を比較し、布の構造による特徴から分類する活動を通して、「自分のTシャツは編物で、服などは、人の動きや生活のことを考えて作られていることが分かった。」、「布には種類があり、いろいろな物に使われていることが分かった。」、「身の回りの布をもっと調べてみたい。」などの感想から、児童の実生活で、無意識に経験や体験をしている布に対する感覚や気づきを、教師が「快適」という視点から価値付けることで、それぞれの素材には特徴があり、布製品のよさを生かして生活に役立てていることに気付かせることができた。

イ 課題

三つの布の種類の特徴を知った後に、ランチマットに適した布の種類を考える場面では、織物を選択した理由として、「自分のランチマットと似ている生地だから。」、「薄くてたたみやすいから。」、「縦糸と横糸があり、伸びにくいから。」などの理由を考える児童が多かった。ランチマットの用途を考えた場合、毎日使うことや食べこぼしなどを考えて、汚れてもすぐに洗えて乾きやすいことも配慮が必要と考えるが、第5学年は、日常着の手入れや洗濯の仕方をまだ学習していない段階なので、児童自らがその視点をもって考えることは難しかった。また、ミシンの操作を経験していない段階だったので、厚さや伸縮性がある布は、ミシンで縫って製作するのには、あまり適していないことに気付くのは難しかった。内容「C 快適な衣服と住まい」は、知識・技能の定着を図るために2年間にわたって、題材配列を計画し、学びが深まるような長期の計画を立てる必要がある。この題材を2学年間のどの時期に設定すると効果的か、児童の実態や家庭・地域の生活を踏まえて十分に検討を行うことが課題である。2年間の小学校家庭科において児童に習得させたい概念的知識にせまるために、教材を精選し、系統性をもった指導改善を行うことで、題材ごとに身に付けさせたい資質・能力を明確にしていく必要がある。

2 検証授業②

(1) 題材名 第5学年「かたづけよう身の回りの物」

(2) 題材の目標

- 整理・整頓に関心をもち、身の回りを快適に整えようとしている。(家庭生活への関心・意欲・態度)
- 身の回りを点検し、課題を見付け、整理・整頓の仕方について考えたり、工夫したりしている。(生活を創意工夫する能力)
- 身の回りの物の整理・整頓ができる。(生活の技能)
- 身の回りの物の整理・整頓の仕方について理解している。(家庭生活についての知識・理解)

(3) 題材の指導計画と評価規準（全4時間）

次	時	学習活動 「」めあて	得られる知識・技能 ◇見方・考え方	指導上の留意点
1	1	「かたづけをした時の、身の回りの変化をふり返ろう」 身の回りにある物に着目し、 整理・整頓 によってどのような物理的、心理的変化があるかを知り、なぜ散らかるのか原因を考える。	○整理・整頓の意味が分かり、整理・整頓を行うことの利点が分かる。 ◇健康・快適・安全	・整理・整頓の意味をおさえる。掃除とは意味が異なり、掃除は別の題材で学習するため、本題材では扱わないことを伝える。 ・自らの周囲（教室、校舎、自宅、自室など）を基準に考えを発展させられるようにする。
	2 (本時)	「整理・整とんの工夫を考えよう」 整理・整頓 の工夫を考え、実践する。	○どのように整理・整頓すると使いやすく、しまいやすいかが分かる。 ○使いやすさとは人によって異なり、自分の生活に合わせて整理・整頓することが重要であることが分かる。 ◇健康・快適・安全	・使いやすさと見た目の美しさは必ずしも一致しないことを確認させる。 ・私的な空間では、整理・整頓の仕方は個人で異なるため、その多様性に気付き、認められる展開となるよう配慮する。

2	3	「物を生かして生活するには、どうしたらよいだろう。」 不用品をどのように処理するか考え、3 Rを中心に物を生かす工夫を出し合う。	○3 Rを理解し、不用品の活用法が分かる。 ◇持続可能な社会の構築	・児童自身が関係している取組（給食の牛乳パックリサイクルなど）を取り上げ、自らも3 Rを実践していることに気付かせた上で、学習を展開するようにする。 ・これまで行った調理実習や、小物作りをもとに不用品の扱いについて考えると、今後の学習にもつながりやすい。
	4	「環境を考えた生活についてふり返ろう。」 ごみを減らさなければならぬ理由を考え、ごみの出し方や分別の方法について知る。 日常生活の中でごみを減らす工夫や分別しやすくする工夫などを出し合い、自分にできることを考える。	○ごみを出すときの注意や分別の仕方が分かる。 ○ごみを減らすために自分にもできる行動が分かる。 ◇協力・協働	・自分の生活を振り返り、どの場面でどのように取り組むかを具体的に考えさせる。 ・広告などを使ったごみ入れ作りや、資源ごみのしぼり方等、児童がすぐに実践できるような実習を取り入れると、興味や関心をもちやすい。

(4) 指導観

昨今、私たちの身の回りでは、多様なライフスタイルや趣向に応えるための多くの商品が販売されている。それらを容易に手に入れることができる環境は、身の回りを物であふれさせ、日常的な整理・整頓の煩雑さを招き、物を大切にしようとする意識を低下させてしまうと考え。物を大切にしようとする意識は、環境問題等の地球的な課題と深く関わっており、子供の頃から整理・整頓や掃除の習慣、資源に対する正しい知識をもつことが重要である。

本題材は、小学校学習指導要領家庭C（2）ア「住まい方に関心をもって、整理・整頓や清掃の仕方が分かり工夫できること。」に基づいて設定している。日常の住まい方への関心を高め、住まい方に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、快適な住まい方を考え、工夫する能力を育てることをねらいとしている。そのために、まず整理・整頓を行っていない架空の部屋を用いて、生活者にとって不都合なことを児童に考えさせる。さらに、自らの

生活についても振り返らせ、身の回りの環境に対する興味と課題意識をもたせる。整理・整頓の仕方や工夫について児童同士で共有できるよう、モデルとなる道具箱を協力して片付け、意見を交流させる。その上で自分の道具箱を整理・整頓し、自らの生活場面にも生かせる工夫を見付けさせる。また、整理・整頓することで出てくる不用品について、出さないようにする工夫を話し合ったり、環境に配慮した処理の仕方について考えを出し合ったりする。

児童の実態として、第5学年は、家庭科の学習に取り組む最初の学年であり、多くの児童が家庭科に対する関心が高く、授業内の発言も活発である。学校で学んだ内容を生かし、家庭で調理や裁縫を行ったり、夏休みの自由課題を製作したりした話を聞く。早く新しいことを学びたいという気持ちを大切にしつつも、学習すべき内容について深く考え、自らの生活に対して課題意識をもつことで、学んだことを実生活に生かしていくきっかけの一つとしていきたい。題材においては、自らの生活を振り返り、具体的な課題意識を明確にもてるように、児童の生活実態にあった教材を精選していくようにしていく。また、積極的に課題解決を行うことで、課題を解決する喜びや実践する喜びも味わえるようにし、学習への主体性を育むことや、学びの連続性を生む効果も期待している。

(5) 視点にせまる手だて

ア 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に向けた視点

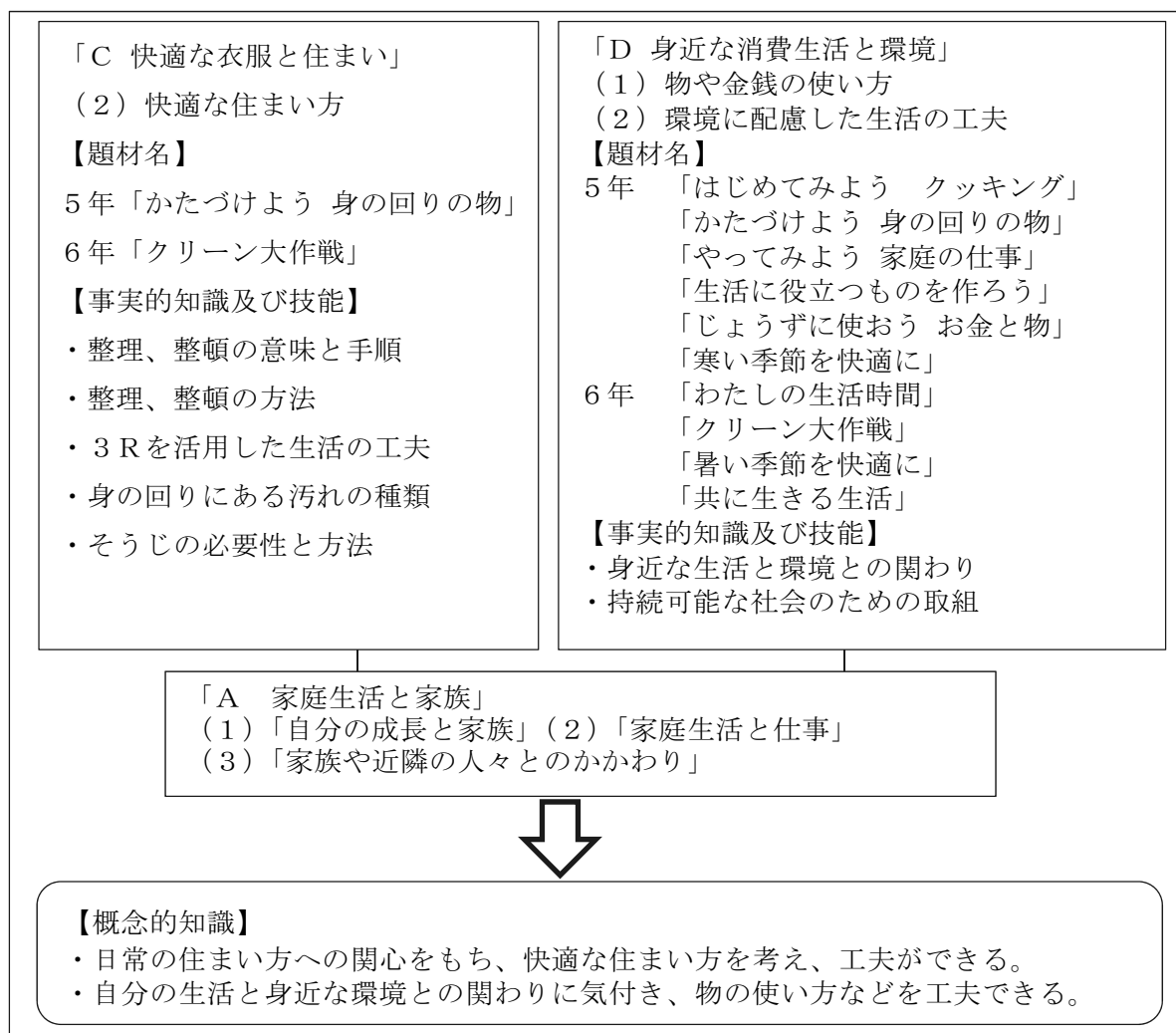
本題材で児童に身に付けさせたい概念的知識を明確にする。その上で、概念的知識を支える事実に知識を明確にし、2年間で他の題材で習得する知識とのつながりを整理しておく【図2】。

なお、内容Aについては全ての題材を通して考えさせるべき内容である。概念的知識の習得のためには、自らの生活に生かす場面も必要である。整理・整頓の工夫を知るといった事実に知識を習得した後に、実際に自分の道具箱を整理・整頓したり、3Rについて学習した後に自らの家庭で実行する方法を考えたりする活動を取り入れる。また、この概念的知識を基に毎時間のめあてを設定し、各授業での振り返りをまとめることで、概念的知識につながるよう学習過程を組んだ。

イ 生活の中から問題を見出して、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

題材の始めに自らの生活に対する課題意識をもたせることで、自分の生活をより良くしようとする態度を育てる。そのため、第1時は片付けをしたときの身の回りの変化について振り返る内容とする。その上で、第2時に児童が普段使用している道具箱を整理・整頓させ、学習した内容を授業内でも生かせる場面を設定し、自らの生活にも役立つ身近な問題として捉えられるようにする。

本題材に係る見方・考え方は、「健康・快適・安全」、「持続可能な社会の構築」、「協力・協働」である。これらの見方・考え方を児童が働かせることができるよう、対話的な活動を取り入れる。班で整理・整頓の工夫を出し合わせる時には、実物の道具箱を整理・整頓することで工夫を視覚的に表現させ、道具箱を持ち寄って比較し、全体で共有することで、自らの生活に生かせる工夫を探させる場面を設定する。



【図2 概念的知識の習得にむけた2年間の計画における事実的知識及び技能の整理】

(6) 本時（2／4時間）

ア ねらい

○身の回りの整理・整頓について課題を見付け、その解決方法を考えたり、工夫したりしている。【生活を創意工夫する能力】

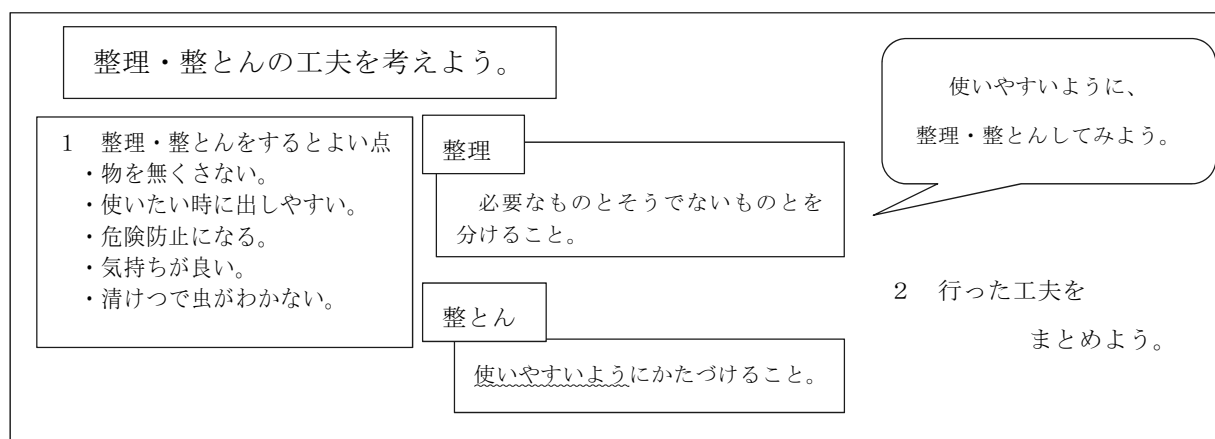
○身の回りの整理・整頓ができる。【生活の技能】

イ 展開

	学習内容 ・ 予想される児童の反応	●教師の支援 □評価
導入	1 自分の生活を振り返り、整理・整頓されている場所を挙げ、整理・整頓によるよい点を確認する。	●前時に学習した「散らかっていると困ること」を参考にさせる。

導入	＜物理的な面＞ ・物を無くさない。 （代わりの物を買うことによる無駄な金銭を使わない。） ・使いたい時に取り出しやすい。 （探すための無駄な時間がなくなる。） ・危険防止につながる。 ＜精神的・衛生的な面＞ ・気持ちがよい。 ・清潔	
展開	めあて 整理・整とんの工夫を考えよう	
	2 配られた道具箱の中を、グループで工夫を話し合いながら、使いやすいように整理・整頓する。 3 整理・整頓した道具箱を集め、それぞれの工夫を知る。 ・同じ種類の物をまとめる。 ・仕切りで区切る。 ・よく使う物は、取り出しやすい場所に置く。 ・あまり使わない物は、奥に置いたり、持ち帰ったりする。 4 3で出た工夫を参考に、自分の道具箱を整理・整頓する。 5 4で行った整理・整頓の工夫をまとめる。 6 本時の活動を振り返る。	●整理してから整頓することを、前時の復習と共に確認する。 ●「使いやすい」という言葉には、片付ける過程も含まれることを確認し、片付けやすさにも考えが及ぶようにする。 ●工夫の共有の前に、自分の道具箱をこれから整理・整頓することを知らせ、自分ならどのような工夫ができるかを考えながら聞くよう、言葉を掛ける。 ●グループによって整理・整頓の仕方が異なることに着目し、児童に理由を考えさせ、使いやすさとは個人の生活や考え方によって変わること気付かせる。 □身の回りの整理・整頓ができる。 【技】（行動観察） □身の回りの整理・整頓について課題を見付け、その解決方法を考えたり、自分なりに工夫したりしている。【創】（ノート）

ウ 板書計画



(7) 検証授業の振り返り

ア 成果

(ア) 基礎的・基本的な知識及び技能と概念的知識の習得に向けた視点

モデルの道具箱を整理・整頓する際は、特に指示はなくとも自然と意見を交流していた。対話的な活動を通して児童の考えを視覚化することで、日常の生活体験や好みなどによって、整理・整頓の工夫が異なる事を実感的に理解することができた。また、この活動を通して知った工夫を生かして自分の道具箱を整理・整頓する活動では、グループの中で意見を交流したり、参考にしたりしていた。具体的な発言としては、「たくさんのプリントがあるから、家に持ち帰ったらどうだろうか。」「袋を使ってみたけれど、いいアイデアだね。」「これゴミだと思うので、捨てた方がよいかもしれない。」などという言葉が聞かれた。モデルの道具箱の提示は、児童の考えを視覚化し、児童と他者の意見や考えの違いに気付くことができる一材料となることが分かり、具体物を操作しながら対話的な学習を行うことが児童の主体性を育成することに効果があることが分かった。また、本題材で働かせるよりよい生活を営むための見方・考え方を明確に捉えておくことや、習得させたい概念的知識をあらかじめ明確にしておくことで、児童の意見を多く挙げさせた上で教師が簡潔に集約することができ、児童の考えの幅を広げ、概念的知識の習得に向けて知識を価値付けることができた。【図2】のような、概念的知識の習得にむけた2年間の計画における事実に知識及び技能を整理した表は、本時で習得させる知識及び技能を認知するだけでなく、児童がこれから学ぶ内容についても把握できるため、3Rと調理実習のつながりや、第6学年で学習するクリーン大作戦についても児童に示唆することができた。

(イ) 生活の中から問題を見い出して、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

題材の導入で、自らの生活を振り返り、整理・整頓が必要な場所について意識させておくことで、道具箱を整理・整頓する活動を通して考えた工夫から、自らの生活へ生かす工夫として応用しやすくなった。また、活動を始める前に整理・整頓によるよい点を、自らの身の回りの様子を想起して振り返ることで、活動に対する動機付けができた。

イ 課題

自分の生活で具体的に生かす場面を想定して振り返っていたのは、全体の約 14%であった。この約 14%の児童は自分の道具箱の整理・整頓が早く、振り返る時間が十分にあったため、教師が、前時に行った整理・整頓が不十分だと感じる自分の身の回りの場所についても振り返るように言葉を掛けた児童である。このことから、学習のまとめの際に、学んだことを振り返り、自分の生活の中での活用方法を考える時間を保障することで、より学びを実生活に生かそうとする姿が見られるのではないかと考えた。

また、道具箱の整理・整頓の後、ロッカーの整理・整頓を行った児童がいた。このように、道具箱を含めて2カ所以上を整理・整頓する方が、他の場所への整理・整頓の方法について考えを発展させやすく、自分の生活に生かそうとする動機付けにもつながると考えられる。題材を計画する際に、教材の組み合わせや効果について考慮する必要があると感じた。

その他、クラス全体での対話的な活動は他者の思いや考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりすることに有効であったが、分かりやすく伝え合う視点でみると、道具箱が遠くて見えない等の問題や、児童の発言の共有化等について課題が挙げられた。ICT機器の活用や、事前に共有する内容を教師が精選しておくことについて今後も考えていきたい。

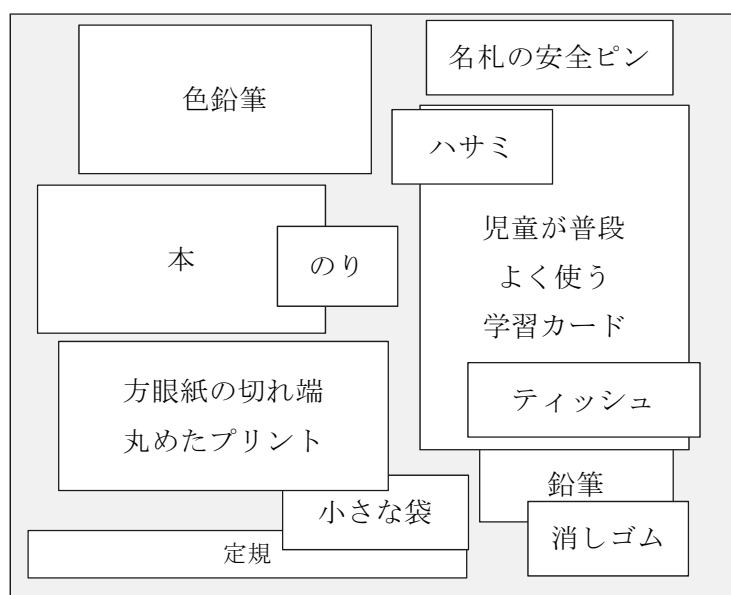
(8) 授業記録

本時では、児童が使用している物品を中心に整理する【資料1】を用意した。児童は、それぞれの生活を振り返り、使う場面を想定しながら整理・整頓を行っていた。

児童からの発言には、「なぜ消しゴムが入っているの。」、「大きい物から入れようよ。」「これはよく使うかな。」、「なわとびカードは下に置くと取り出しにくいね。」などが挙げられた。物品ごとに児童の反応を整理すると【表3】のようになる。

このことより、整理・整頓の後は、使用場面を実際に想定し、使いやすいかどうかを確かめながら活動を進めていたことが分かる。

【資料1 モデルとなった道具箱の中身に関する配置図例】



【表3 モデルの道具箱に入れた物品と児童の反応（一部）】

物品	個数	児童の反応例
鉛筆	5本	たくさんあるから1本にしよう。筆箱に戻そう。
消しゴム	5個	たくさんあるから1個にしよう。筆箱に戻そう。
はさみ	1本	よく使うから前に置こう。危ないからケースに入れよう。
のり	1個	よく使うから前に置こう。筆箱に入れよう。
のりが収納されている袋	1枚	捨てよう。持ち帰ろう。
色鉛筆	3本	箱に戻そう。
色鉛筆の箱	1箱	箱が大きいから下に置こう。ロッカーに入れよう。
丸めたプリント	1枚	たたんでしまっておこう。捨てよう。持ち帰ろう。
ポケットティッシュ	1個	ランドセルに入れよう。使いやすいように前に置こう。
本	1冊	出しやすいように上に置こう。
方眼紙の切れ端	2枚	捨てよう。
名札の安全ピン	1本	名札を直して元に戻そう。
なわとびカード	1枚	ロッカーに入れよう。見えなくなるから下に敷こう。すぐに出せるよう上に置こう。

【表4 児童のまとめ記録の（一部）】

	記 載 内 容
児童A	・整理、整とんの工夫はよく使う物を手前に入れる。 ・色鉛筆などは、きちんとケースにしまう。 ・部屋などは使う物は分かりやすいところに、あまり使わないものはタンスや箱の奥にしまう。
児童B	・普段から整理・整頓をやっていると手間が掛からないのに、できていないので手間が掛かってしまって大変だった。普段からできるようにしたい。
児童C	・今日は整理、整頓の工夫を考えました。よく使う物は前にあまり使わない物は後ろにということを考えました。自分の机も同じように整理、整頓しようと思います。
全65の記述の内、64.6%に当たる42の記述が具体的な工夫の内容をまとめているものであった。13.8%に当たる9の記述が、行った整理・整頓の工夫を道具箱以外へ生かそうとする意欲についてまとめていた。12.3%にあたる8の記述が、整理・整頓に係る心情の変化についてであった。	

VII 研究の成果

本研究では、研究主題を「学びを実生活に生かそうとする児童の育成」と設定し、大きく変化する時代の中で、家庭科における学習を通した学びを児童が実生活に生かし、自らの人生を豊かに切り拓いていくことのできる児童を育成することができるように、自らの生活に生かす場面を考える活動を通した授業改善を視点とし研究を進めた。本研究において見られた成果は以下の通りである。

1 基礎的・基本的な知識及び技能と概念的知識の習得に向けた視点

各題材の特色や、身に付けさせたい基礎的・基本的知識及び技能と概念的知識について、他の題材で習得する知識とのつながりや児童の生活における実践とどのように関係していくのかを整理し、身に付けさせたい概念的知識について明確にした上で授業構成を行うこととした。また、児童へ提示するめあては授業における活動内容に留まらず、各題材で習得させたい概念的知識につながるものを提示し、めあてに沿って、児童の思考が概念的知識につながるような活動内容を計画していくこととした。

検証授業①においては、布の性質について知ることをめあてとするのではなく、どのような使われ方をしているのかを考えることをめあてとして提示した。このことで、「織物は伸びにくい。」「編物はよく伸びる、柔らかい。」などの事實的知識の習得のみならず、「重いものを入れる手提げバッグは、織物が適している。」「運動着にはよく伸びる編物が使われていることが多い。」という汎用性の高い概念的知識へと深めていくきっかけを作ることができた。概念として得たこれらの知識は、今後、児童が布製品を製作したり購入したりする時に、適した物を選択する視点として生かすことができるであろうと考えられる。

検証授業②においては、「道具箱を整理しよう」というめあてではなく、「整理・整頓の工夫を考えよう」と設定することで、自分の生活に合わせた整理・整頓の工夫を考え、実践することができた。使用場面を想定せずに道具箱の隙間を埋めるように物をはめ込んだり、単に大きいものから順に重ねていったりするのではなく、「よく使うものは手前に置くと取り出しやすい。」「小さいものはまとめるとすっきりと見える。」など、使いやすさを意識して活動することで、その場限りの技能の習得ではなく、今後、生活が変化しても、その場に適した工夫を考える力へとつなげることができた。

2 生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、それを解決する力を育成する視点

今回の検証授業では、題材の様々な場面において児童自身の生活を振り返らせ、自らの生活と学習内容のつながりを考えさせることで、自分にとって身近な問題を扱っていることを意識させた。また、既存の知識を実生活の中で活用したり、よりよい行動を選択したりするために、児童が生活の営みに係る見方・考え方を働かせることができるような発問の仕方や資料の提示の仕方、扱う教材などを精選した。

検証授業①では、自分の洋服や家庭科室のカーテンなど、児童の身近な布製品について調べる活動を取り入れることで、「自分で確かめたい」、「他の布製品についても調べたい」という主体的な態度を引き出すことができた。布製品は日常的に触れる身近なものであること、布は衣服や寝具など身の回りの様々なものに使われている素材であること、今後自分で布製

品を製作したり購入したりする機会を想像しやすいこと、これらを意識させるような発問や資料提示を実践した。ループを使って今自分が着ている洋服等の身の回りの布製品を丹念に観察し、興味をもって進んで他者との関わりを求める姿がみられ、本学習に対する主体性の高まりが感じられた。また、本題材における見方・考え方を、衣生活における「快適」とし、布の特徴を捉えた上で、ランチマットを製作するにはどのような布が適しているかについて、「快適」という見方・考え方から迫った。児童が日常的に使用している布についての経験や気づきを教師が価値付けることで、児童の考えを更に深めることができた。

検証授業②では、モデルとなる一つの道具箱をグループみんなで相談しながら整理・整頓する、という対話的な活動を通して、人それぞれの生活に合わせた工夫の仕方があることに気付くことができた。このことより、実生活に近い形の模擬活動を教材として取り入れ、多様な意見を交流させることで、学んだ知識・技能を活用していく動機付けになり、具体的な応用場面を想起させることができることが分かった。

Ⅷ 研究の課題

1 概念的知識の習得にむけた2年間の計画における事实的知識及び技能の整理

本研究では、2年間の家庭科全体の指導計画において、題材ごとの概念的知識を支える事实的知識を明確にし、事实的知識がどのように関連していくのかを構造化することにより、一題材における基礎的・基本的な知識及び技能の習得のみならず、小学校家庭科において習得させたい概念的知識に向けたスモールステップを計画した。しかし、基礎的・基本的知識及び技能と、身に付けさせたい概念的知識については抽出したものの、知識相互の関連や効果的な習得段階までは言及しておらず、発問に対して思考の範囲が限られてしまう場面が出てきてしまった。今後も各題材で身に付ける知識及び技能の関連についての整理と、児童の生活経験や既習の知識及び技能を把握し学習計画を立てる必要がある。また今後は、家庭科のみならず他教科領域等で学ぶ内容との関連についても把握し、総合的な計画を立てることも視野に入れたい。

2 意図的・計画的な題材計画

実生活を想定した教材を意図的に設定することはできたが、実際に実生活を振り返る時間を保障できなかったことで、学んだことを実生活へと生かす場面まで想起できる児童に偏りが出てしまった。一方成果として、学習で得られた工夫を実生活に生かす場면을複数提示することで、基礎的・基本的な知識及び技能が概念的知識に深まりやすい成果も挙げられていることから、題材計画の中に児童が学んだ内容を実生活に生かす場面について意図的・計画的に複数組み込むことが必要であったと考える。

平成 29 年度 教育研究員名簿

小学校・家庭

学 校 名	職 名	氏 名
港 区 立 芝 浦 小 学 校	主任教諭	◎ 佐 藤 通 子
足 立 区 立 綾 瀬 小 学 校	教 諭	白 石 梢
町 田 市 立 南 大 谷 小 学 校	教 諭	神 前 珠 美

◎ 世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 西 尾 英里子

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

小学校・家庭

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社